

平成二十一年（二〇〇九年）七月十六日 不思議な船との遭遇の意味

神から人へ、人から神へ。

多くのこの世の現実、現象、全てに意味あり、偶然はなし。

人はそこより意味を汲み、神のご意図を、宇宙の意思を、見えない力を 読み取るべし。

さにて本日、そなたの問いは。

（富岡興永宮司様が、以前八丈島に行かれた時、船体に「オセアニアン・グレイシス」と書かれた船が沖で二、三日停泊していたそうです。煙突もなく、また地元でそのような船は見たことがない、また人影も無かったそうです。この船との遭遇にはどのような意味があるのでしょうか）

さにも小さな出来事なれど、人は己の思い込み、己の心の持ち方にて、大切なことをば見落として、無駄な事には気をかけるもの。

この世の出来事一つ一つ、全てに意味なきものはなし。なれど全てに神の意図、天の意向が働くになし。

人間界の 行い、営み、それらに人の意思も混ざりて、現実界にて現われるとき、始めの意図は大きく変わりぬ。

なればこの世の現象全てを、そのまま神の意図として、そこから意味を読み取るは、人の知能を超えしことなり。

人は己の関心、興味、そこに縛られて逃れ得ぬ。

純なる無垢の心にあらねば、全てを均等、公平に、見通す力は持ち得ぬもの。

気にする心に囚われず、しばしの時を 経た後に、その持つ意味を考えるべし。

そのとき見えぬ、何らかの意味、わからぬことも、見えてこむ。

真に意味あることならば、必ず一度や二度になく、神は必ず、意味を伝えむ。

伝わるまでに、幾度も、形を変えて、時を変え、場所を変えても、伝えぬはなし。

心に疑問や不信の念が、広がる心を 納めるべし。

心の波を平らかに、鎮めて 浄化し、穏やかなれ。

心は静朗、雲ひとつなく、心は平らかに、波 静かなれ。

人は心の曇りに囚われ、波の形に拘りて、自ら鎮める 術を持たざる。

波の形は刻一刻と、変わりて留まることはなし。

波の形の一つ一つ、そこに意味を求めるになく、元なる海に、意識を向けよ。

波は瞬時に移りてゆけど、海は変わらず、命を育む。

全ての事象は波の如。

人の一生、人生も、立ちては消える 波の如。

人は海を見ることなく、波に囚われ、日を送る。

気づきしときには、己の生も、海に帰りて、抱かれむ。

この世に起こる事象の奥の、元なる意味を、見出せよ。

人はそれぞれ、この世に生まれ、海に気づかず、果てるが多し。

短きこの世の束の間を、小さきことに拘ることなく、大なる意味を 求めてゆけよ。

この世の生は、独りにあらず。人類全てが、向上すべく、一人ひとりの靈性を、高めることに、傾注すべし。

この世で学びし御魂の知恵は、海に戻りて、尚 消えず。さらなる富を、もたらさむ。

一人の命は短けれども、悠久の中にて、繰り返され、積み重なりて、豊かに富まむ。

無駄なる学びは一つもなし。

そもまた生きる糧なれよ。さにて終わる。